

国際漁業学会 (JIFRS) 短信

<http://www.jifrs.info/>

事務局 〒631-8505 奈良市中町 3327-204 近畿大学農学部内

Tel : 0742-43-6021 Fax : 074243-6021 E-mail: mariji@nara.kindai.ac.jp

郵便振替番号 : 00100-6-26448 国際漁業研究会

三菱東京UFJ銀行富雄(トミオ)出張所 普通口座 3698979 国際漁業研究会

2011 年度第 2 号

2011 年 10 月 27 日刊

目次

- | | |
|----------------------------|------|
| 1. 会長あいさつ「世界を救う研究の活性化に向けて」 | 多田 稔 |
| 2. 事務局より | 松井隆宏 |
| 3. 本年度の学会賞選考結果 | 山下東子 |
| 4. 国際漁業学会 2011 年度大会に参加して | 中島 亨 |

1. 「世界を救う研究の活性化に向けて」

多田 稔 (国際漁業学会会長・近畿大学)

JIFRS の今年度の研究大会は奈良で開催され、シンポジウム「これからの日本と世界の養殖業を考える」では漁業システム分野の講師による御講演を交えて、今後の水産業の方向性を規定する養殖と捕獲漁業の関係についても議論を深めることができ、盛況のうちに終了しました。また、個別報告には多くの報告希望が寄せられ、次回から日程を2日間にすることも検討することになりました。昨年度は休刊した学会誌「国際漁業研究」の刊行が再開され、国際発信に向けて英文誌の刊行準備も進んでいます。

前回の大会から今回までの間に、日本では東日本大震災や原発事故が発生し、欧米では財政赤字に端を発して金融危機の再来が懸念され、それが急激な円高と産業空洞化を招いて、水産業の復興を妨げる要因となっています。このような国際的に連鎖する深刻な事態に対して、危機の回避や将来の産業構造、ひいてはアメリカ極後の世界をどう構築するかに関する有意義な思索と提言がなされているとは思えません。私が研究に接し始めた頃には、「ケインジアン vs 合理的期待マネタリスト」、「輸出主導型発展 vs 輸入代替型発展」、「農産物貿易自由化・構造改革 vs 伝統的農村秩序維持」というそれぞれ一理あり、どちらに転んでも現実的意味が大きく変わるような論争があり、学会誌にも感銘を受ける論文が散見されましたが、現在の数多くある学会誌からインパクトのある論文を探すのは困難になりました。ここでは、なぜそうなったのかを、国内要因と世界的要因から述べたいと思います。

まず、国内要因として、研究時間の不足という深刻な問題があります。アメリカ勤務中に経験したことですが、国立衛生研究所 (NIH) に派遣されてくる日本人医学研究者は喜びに

涙を流して研究していました。まともな研究を仕上げるには一定期間にわたる一定密度以上の良質な時間投入が必要ですが、日本では多くの研究機関でその条件が満たされていません。兵法の鉄則を外し、弱小戦力の分散逐次投入を行い、ガダルカナルの戦いを再現しているのが実態です。前号で IT は希望の星であったと過去形で述べたように、IT 革命によって創造的な仕事に配分する時間が増加し、知識労働の生産性が飛躍的に向上すると予想されていました。しかし、実際に起きたことは、間接部門の大幅な削減、場合によっては研究促進に寄与しない間接部門の肥大化と、IT 導入によっても残存する事務労働の研究教育部門への移転でした。これによって、「研究者はいつ研究をしているのか」という疑問が投げかけられるようになり、未来への投資は失われました。研究者が研究しなくても雑用をすれば見逃してもらえらるというのはもってのほかです。ここで、「雑用」とは、他の職種がやる方が効率的にできる仕事のことです。これは、一般化して考えると、日本型組織形態の抱える弱点であり、職種ごとの職務内容が順守されないことによって、ある場合には多能工の育成といった利点もありますが、各人が比較優位を発揮することができず、上から下まで雑用にかまけてアマチュア集団化し、「成果なき繁忙」に陥るといふ大問題を抱えていると言えます。

次に、世界的要因として論文量産主義があります。かつて日本では、論文とは理論の発展に寄与するペーパーでした。そうすると、なかなか論文が書けない、博士になるのが遅れる、日本人が国際的に活躍するのに不利、そこで、論文の基準を国際標準に揃えようということで、問題解決に有用、新しい知見の提供という基準が追加されました。ここで問題となるのが、どんな問題解決や新知見でもよいのか、ということです。ここが不明確なため、ある場所のある品目のみ、したがって、それを読んだところで他の問題に適用できない、あるいは、ある理論の仮定をさらに非現実にした場合の理論的新知見が得られた、といった論文がはびこり、その種の論文をお互いに査読し合うために研究者の時間がますます奪われるという悪循環になっています。私の経験した分野にも、ある一定の方法に従って分析すれば、それによるインプリケーションがほとんどなくても論文として採用されるという国際誌があり、こういうのはもはや研究とは言えず、華道や茶道のような「道」になったものだと思います。かつて、日本で医学を志した孫文や魯迅は、医者になって1人1人の病気を直しても社会の根源的な病理を直さなければきりが無いということで、政治や文学の世界に転向していったようです。研究の世界がチャレンジャブルな課題への指向を失い、矮小化された問題に没頭するという病理を改善できなければ、人間の考え方の変化を通じて現実世界に影響力を及ぼす文学や評論と比較した研究の魅力度は低下の一途であると思います。

現在の先進国では、民主主義の下で、自己責任が適用される領域の縮小とモラルハザードによって、金融危機の連鎖が頻繁に生じるようになりました。このままでは、税収と安全保障・社会保障・国債利払いが同額になり、産業政策の分野でいかなる提案をしようとも実行する元手がないという事態に陥ってしまいます。経済危機、エネルギーといった世界共通問題を乗り越えるための政策研究や技術開発をめぐる天王山の戦いに敗れば、他の分野でいくら局地戦の勝利を積み重ねたところで結果は同じであることを肝に銘じる必要があります。幸いなことに、JIFRS の研究大会の翌日に開催された兄弟研究会である TEMF (近代経済学・経営学的漁業経済研究会) には多くの若くて優秀な研究者が参加し、活発な議論がなされました。彼らにも天王山での戦いの勝利を託したいと思います。

2. 事務局より

松井 隆宏 (近畿大学)

2011年8月4日におこなわれた理事会・総会において、以下のことが決定されましたので、事務局より報告いたします。

(1) ジャーナルについて

ジャーナルに、「実態報告」の項目を新たに設けることになりました。詳しくは、学会ホームページをご参照下さい。

(2) 役員について

理事会において、東京大学 黒倉壽 氏、明海大学 山下東子 氏の2名が、副会長に互選されました。理事会において、東京海洋大学学長顧問(元 FAO 水産局長) 野村一郎 氏が、顧問に選任されました。また、総会において、福井県立大学 東村玲子 氏、OAFIC 綿貫尚彦 氏の2名が、理事に承認されました。

(3) 次期大会について

来年度の大会は、2012年8月4・5日、もしくは6・7日に、東京大学農学部でおこなう方向で検討しています。今年度まで1日間での開催でしたが、個別報告数の増加に伴い、2日間での開催とする予定です。詳細は、次年度第1号の短信でお知らせいたします。

(4) 義援金について

IIFET からの東日本大震災に対する義援金 257,150 円は、IIFET2004 でお世話になった福島県の相馬双葉漁協、および、宮城県の塩釜水産物仲卸市場に同額ずつお渡ししました。

(5) 表彰について

前号でお伝えしましたように、山本賞(国内賞)の受賞規定を明確化し、功績賞、学会賞、奨励賞の3賞に細分化いたしました。そのなかで、奨励賞の資格に、IIFETにおける報告が新たに追加されました。(功績賞：学会の活動に対して、大きな貢献のあった会員。学会賞：書籍、もしくは一連のまとまった研究を通して、学術の発展に大きく寄与した会員。奨励賞：おおむね40歳以下で、本学会誌に掲載された論文、IIFETにおける報告、もしくはそれらを含む一連の研究を通して、学術の発展に寄与した会員)。

3. 本年度の学会賞選考結果

山下 東子 (明海大学)

2011年8月4日に学会賞選考委員会(委員長：山下東子)が行われました。審議の結果、本年度の学会賞選考結果としましては、永年にわたり学会活動に大きな貢献をされた松田恵明 前 JIFRS 会長を JIFRS 功績賞の対象者として選考しました。学会賞、奨励賞、論文賞につきましては、本年度は該当なしとしました。

ただし、学会賞、奨励賞、論文賞につきましては、来年度の総会にあわせて、過去3年分の業績を対象として改めて選出する予定です。受賞候補の推薦を受け付けますので、推薦方法は、次年度第1号の短信をご参照下さい。

4. 国際漁業学会 2011 年度大会に参加して

中島 亨（東京大学・日本学術振興会特別研究員）

8月4日に近畿大学農学部にて、国際漁業学会(JIFRS) 2011 年度大会が開催されました。ここでは、同大会の個別報告ならびにシンポジウムに参加した感想を述べさせていただきます。私は大学院で農業経済学に関する研究を中心に行っておりますが、最近漁業にも関心を持ち始め、今年度新たに JIFRS の会員となり、初めて大会に参加させていただきました。大会参加を通じて多くのことを勉強させていただきましたが、その際、他学会の大会と比較して特徴的なことも多いと感じました。

まず、個別報告についてです。私自身も報告させていただき、また、他の報告も色々と拝聴したなかで、議論の活発さが印象的でした。大会の規模自体はそれほど大きいものではなく、個別報告の聴衆も1会場あたり20名程度ではありましたが、8分間の質疑応答では質問が止むことなく、報告者が回答に窮するような鋭い質問も多く見られました。報告内容は国内外の事例を対象に、実態分析から計量経済学的な実証分析まで幅広く、参加者の研究分野の多様性をうかがい知るとともに、様々な視角から質疑が飛び交い、参加者の熱意が感じられました。

つづいて、シンポジウムについてです。「これからの日本と世界の養殖業を考える」というテーマで4つの報告があり、こちらもかなり幅広い内容を含むものでした。宮田勉氏の「三陸におけるワカメ養殖業の制限要因－3.11大震災前後の比較－」では日本のローカルな話題、松井隆宏・原田幸子氏の「わが国クロマグロ養殖の展望－立地および漁場の制約に注目して－」では日本の広域的な話題、松岡達郎氏の「世界の水産業の課題とその動向」では世界の話、と段階を踏んで、経済学的な視点を中心に全体像と「これから」が示されたのち、山根猛氏の「バイオマスと給餌養殖業」では、バイオマスの視点を中心に養殖業の抱える普遍的な問題が提起されました。そして最後に、それらを踏まえてパネルディスカッションがおこなわれましたが、漁業に関して初学者である私のような者にとっても全体的にわかりやすく、大いに勉強になりました。その一方で、経済学的な視点を中心とした分析に対し、経営学やバイオマスの視点からの問題提起があるなど、議論の方向性がやや不鮮明になる側面もあったように思えました。「バイオマスの視点から問題がある（可能性はある）」という指摘にとどまらず、バイオマスの問題を経済学的にはどう解釈するか、もしくは、経済学的に解決方法を探るとしたらどうなるか、といったような一貫した視点による議論があれば、全体としてよりまとまりが出たのではないかと思います。

とはいえ、これは私が経済学を専攻するがゆえの感想であり、また、JIFRS の最大のストロング・ポイントであると感じた、多様性や守備範囲の広さが失われるようなことがあって

は、本末転倒であるとも思います。今後も、学問的な軸を明確にしつつ、包括的な話題から学術的専門性を追求した詳細な議論まで、幅広くおこなっていただければと思います。

最後にもう1つ、大会に参加して感じた JIFRS の特徴として、参加者が若いことが挙げられます。個別報告では大学院生や 30 代以下の研究者の個別報告が多く、シンポジウムにも若手研究者の報告が含まれ、会場全体としても、私が経験したことのないほど、若手の比率が高かったように思います。これが漁業系の学会全般についてあてはまるのか、それとも JIFRS の持つ特徴なのか私には判断できませんが、いずれにしても、JIFRS の今後の飛躍が期待されるものでした。そうしたなかで、海外に向けての情報発信や、留学生等の参加をどのようにして増やしていくかが、今後の課題であると思います。

私自身の漁業に関する研究は現時点ではわずかですが、今後も微力ながら学術的貢献を目指し、研究を続けていきたいと考えております。そしてそのことが、JIFRS の今後の発展に少しでも貢献できれば幸甚です。今回の大会は、多くのことを吸収することができ、非常に有意義なものとなりました。大会への参加をお声かけ下さった、そして、漁業経済の研究に引き入れて下さった先生方に、感謝申し上げます。また、JIFRS 会員のみなさまには、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。